

日本人の文字生活史序章

——漢字の伝来と定着（奈良時代まで）——

西田直敏

一 はじめに

「言語生活」を、話す・聞く・書く・読む生活とした場合に、音声によるものを音声言語生活、文字によるものを文字言語生活という。

文字言語生活を「文字生活」と称することは、既に、一九六六年に、国立国語研究所報告29『戦後の国民層の文字生活』に用いられているところである。同書では、「文字生活」を「文字を使って社会生活・人間生活を営むこと」（永野賢）と定義している。

本稿に掲げる「日本人の文字生活史」という用語は、「日本人の生活の中で、文字がどのように意識され、使われてきたかの歴史」の意味で用いる。

私は、文字生活史を次のように時代区分をする。

- 1 古代前期（奈良時代及びそれ以前）
- 2 古代後期（平安時代）

- 3 中世前期（鎌倉時代）
 - 4 中世後期（室町時代）
 - 5 近世（江戸時代）
 - 6 近代（明治・大正・昭和〔前・中期〕）
 - 7 現代（昭和後期・平成）
- それぞれの時代の文字生活の特色を簡単に示すと、次の通りである。
- 1 古代前期
文字の獲得——漢字の伝来
漢字の定着
 - 2 古代後期
万葉仮名の発生
仮名（片仮名・平仮名）の発生
国字（日本製漢字）
 - 3 中世前期
仮名遣問題の発生
 - 4 中世後期
ローマ字の伝来
寺子屋教育はじまる
 - 5 近世

出版が盛行する

寺子屋教育発達

神代文字論

6 近代

印刷文化

新聞・雑誌盛行

義務教育

国字問題

国語運動起こる

7 現代

コンピュータ、ワープロ盛行

右のような展望を持ちつつ、本稿では、奈良時代までにおける漢字の伝来と日本人の文字生活への定着の種々相、その中から発生してくる万葉仮名の問題、文字への呪術的な信仰等の問題について述べることをする。

二 古代前期の文字生活

(一) 漢字の伝来

日本には、固有の文字がなかった。八〇八年（大同三年）に齋部廣成は『古語拾遺』の序に、次のように記している。

蓋聞、上古之世、未有文字。貴賤老少、口口相伝、前言往行、存而不忘。書契以来不好談。

日本の記事を載せる中国の史書には、成立年代から見ても、三世紀の『三国志・魏志・東夷伝』、五世紀の『後漢書・東夷伝』には、文字についての言及が全くない。七世紀の『隋書・東夷伝』に、次のように記されている。

無文字、唯刻木結繩、敬佛法、於百濟、求得佛經、始有文字。

漢字の伝来については、『日本書紀』応神天皇十六年春二月の条に、次のようにある。

王仁来之、則太子菟道稚郎子師之。習諸典籍於王仁、莫不通達。

このところを『古事記』では、

又科賜百濟国、若有賢人貢上、故受命以貢上人、名和邇吉師、即論語十卷、千字文一卷并十一卷、付是人即貢進

と記している。

『隋書』に記された仏教の百濟からの伝来については、『日本書紀』欽明天皇十三年冬十月の条に

百濟聖明王聖王、更名、遣西部姬氏達率怒唎斯致契等、献釈迦仏金銅像一軀・幡蓋若干・經論若干卷

とある。

しかしながら、周知の如く、漢字はこの時に伝わったのではない。『後漢書』倭伝の、建武中元二年、光武帝が「賜以印綬」の印は、これまた有名な「漢委奴国王」の金印として現存する。この印字を漢字として認識したか否かについては、中国に外交使節を送り、その文物、文化を見聞して使節が帰ってくる以上、奴国の王の宮廷では、文字の認識があつたと考えるべきである。また、『魏志』倭人伝に、明帝景初三年（二三九）に卑弥呼は、詔書、印綬を給わり、使者に因つて上表し詔恩を謝している。このことは、卑弥呼の使者大夫難升米ら一行には、中国語を話す人物、中国語が読める人物がいたと思われ、また、明帝の詔書に応えて「上表文」を書ける人物がいたことになる。

貿易・通商ということではなく、政治・外交において、漢字は、中国語の文字として、日本にもたらされた。従つて、その文字には、特に印には政治的權威の重みと輝きがあつたと考えられる。

日本における漢字の最初の使用がいつであるかが、近年の開発に伴う発掘調査によつて、次々と新発見の発表が行われている。一九九八年には、三重県安濃町の大城遺跡だいじろから出土した二世紀前半の土器片にヘラ書きされた「奉」と読むことができる文字が現在のところ最古のものであるとされた。

(二) 日本で書かれた漢字——五、六世紀——

一九八八年一月に発表された千葉県市原市稲荷台出土の鉄剣に「王賜□□敬□」の銘のあることが発表され、五世紀半か後半とされた。これより前、一九七八年には、埼玉県行田市の埼玉古墳群さいたまこふぐんの稲荷山古墳から出土した鉄剣に、次の銘文が見出された。

辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比埤其兒多加利足尼其兒名弓己加利獲居其兒名多加披次獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半弓比（表）

其兒名加差披余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事來今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也（裏）

右の「獲加多支鹵大王」は雄略天皇と解されていて、「辛亥年」は四七一年とされている。

この鉄剣の銘文の発見によって、熊本県玉名郡菊水町の江田船山古墳出土の太刀の銘

〔因〕下獲□□□鹵大王也、奉□典曹人名先□弓、八月中、用大鋤釜并四尺逢刀、八十練六十拵三寸上好扣刀、服此刀者長壽、子孫注々得三恩也、不失其所統、作刀者名伊太口、書者張安也

における「獲□□□鹵大王」が従来読まれている「弥都鹵大王」^{みずは}即ち反正天皇ではなく、雄略天皇に改められた。

雄略天皇は、『宋書・倭国伝』の「武」である。順帝の昇明二年（四七八）に使を遣わして上表文を奉った。

封国偏遠作藩于外、自昔袒櫛躬操甲冑、跋涉山川、不遑寧处、東征毛人五十五国、西服衆夷六十六国、渡平海北九十五国、王道融泰廓土遐畿、累葉朝宗不愆于歲、臣雖下愚忝胤先緒、驅率所統、歸崇天極、道遙百濟、裝治船舫、而句驪無道、欲見吞掠抄辺隸、虔劉不已、每致稽滯、以失良風、雖曰進路、或通或不、臣亡孝濟、実忿寇讎壅天路、控弦百万義声感激、方欲大举、奄喪父兄、使垂成之功不獲一實、居在諒闇、不動兵甲、是以偃息未捷、至今欲練甲治兵、申父兄之志、義士虎賁、文武效功、白刃交前、亦所不顧、若以帝德覆載、摧此彊敵、靖方難、無替前功、竊自仮開府儀同三司、其余咸仮授、以勸忠節

雄略天皇の宮廷には、このように堂々としたる中国文を書ける人物がいた。江田船山古墳の太刀銘の筆者張安は朝鮮半島からの渡来人であろう。刀鍛冶伊太口^{通カ}、稻荷山古墳の太刀名にある獲居臣、以富比埤、多加利足尼、弓己加利獲居、多加披次獲居、多沙鬼獲居、半弓比、加差披余という人名は、仮借の方法で、漢字の音のみを用いて書

かれたもので、万葉仮名ではない。

劍と銘文は、雄略天皇の上表文の通りに王権の支配下にあることを示すものである。

日本で作られた漢字の遺物には、太刀銘のほか、鏡銘、土器類に刻まれたもの、墨書されたものなどがある。鏡の銘には、中国鏡を模倣して作られたもの（仿製鏡）の中には、工人によって十二支を誤ったもの（奈良県北葛城郡新山古墳出土、方格四神鏡）、文字を誤ったもの（佐賀県東松浦郡古墳出土、三神三獸鏡）などがあることから、日本の工人が漢字を図柄としか考えていなかったためと言われている。

が、鏡の銘の全てが間違っているわけではない。卑弥呼が魏帝に与えられた鏡かという景初三年と記された三角縁神獸鏡には、景初四年となっているものがあり、改元を知らなかった日本で作られたものとされている。が、その銘文は渡来人によって書かれたものであろう。

四世紀後半（三六三年）には、百済国からの奈良県石上神宮の七支刀の銘文や和歌山県隅田八幡宮の人物画像鏡銘

癸未年八月日十大王幼弟王在意紫沙加宮時斯麻念長奉遣開中費直穢人今州利二人等所白上同二百旱所此竟がある（癸未年は四四三年説、五〇三年説などある）。

中国語の文字である漢字は、朝鮮半島を経由する中国との往来、中国の漢字文化の洗礼を受け、既に漢字文化圏に属していた朝鮮半島特に百済との密接な関係によって、日本に伝来した。文物とともに人も渡来した。漢字が伝われば、当然、その読みと意味とが問題になる。日本語への翻訳も行われたに違いないが、その痕跡はまだ見つからない。

『日本書紀』雄略天皇紀七年に百済から献ぜられた「手末才伎」に住み所を与えた記事に、「訳語卯安那」が見える。「訳語」は「通訳」である。

これより先、『日本書紀』履中天皇紀四年には、「始之於諸国置国史、記言事達四方志」とあって、諸国の情勢を記録することが始められている。この文章は中国の杜預の『春秋左氏伝序』の「周礼有史官、掌邦国四方之事、達四方之志、諸侯亦各有国史」等によっている。津田左右吉は「国」という行政区画の定められた大化改新以後に考えられたものとしたというが（日本古典文学大系『日本書紀 上』補注）、日本と親密な関係にあった百済は『三国史記』卷二十四の近肖古王紀に「古記云、百済開国已来、未有以文字記事、至是、得博士高興、始有書記、然高興未嘗顯於他書、不知其何許人也」とある。近肖古王は、四世紀半に在位した王である。履中天皇は、倭王讃に比定されることもある五世紀前半の天皇である。国内情勢の記録は、単数もしくは複数の渡来人によって十分可能な仕事であるとすれば、宋書の倭の五王の時代にそういう記録が始められた可能性を否定することはできない。

外交文書に用いられていた漢字を国内の記録（歴史は記録から始まる）に用いることは自然のなりゆきである。記録が始まると、地名、人名は、仮借の方法で表記することになる。「意紫沙加宮」「斯鬼宮」「獲加多支箇大王」など。一字一音式の字音仮名の成立はこうしたところから始まったと推定されよう。

この一字一音式の字音による漢字表記は、前述した如く仮借による中国式表記であって、万葉仮名と称すべきものではない。漢字の日本語訳つまり訓を宛てることによって成立する訓仮名とあいまって、「万葉仮名」と称すべきものである。

五世紀後半から六世紀にかけての須恵器や埴輪に漢字が刻された遺物が各地で（愛知県春日井市勝川遺跡、大阪府堺市野々井遺跡）発見されている。この時期になると、仿製鏡のように漢字の認識がなかったり、漢字を誤るということがなくなり、工人たちの間に漢字が文字として使われていたことがわかる。

六世紀には、五経博士段楊爾が百済から貢上された（継体天皇紀七年へ五一三～六月）。継体天皇十年へ五一六～九月に、五経博士漢高安茂が段楊爾と交代。欽明天皇元年へ五四〇～八月に秦人七千五十三戸の戸籍を作る。同五

年へ五四四〇九月、百濟丈六仏像を建立。同十三年へ五五二〇十月、百濟聖明王より仏教伝来（金銅釈迦仏像一軀、経卷若干卷等）、同十五年へ五五四〇六月、百濟に、医博士、易博士、曆博士、卜書、曆本、藥物の貢上を求む。

敏達天皇元年へ五七二〇、高麗からの表疏（国書）^{ふひと}を史たちが三日かかっても読めなかったが、船史の祖王辰爾がよく読み釈いた。この国書は烏の羽に書かれていたので読めなかったが、辰爾は飯の氣に蒸して、帛を羽におしあててその字を写しとったという。

推古天皇十年へ六〇二〇十月、百濟僧勸勒、曆本、天文地理書、遁甲方術書を貢上。同十一年へ六〇三〇十二月、冠位十二階制定。同十二年へ六〇二〇四月、聖德太子、憲法十七条作成。同十六年へ六〇六〇四月、遣隋使小野臣妹子、使節裴世清を伴つて帰国。但、煬帝の国書は、百濟で盗まれたという。『隋書・倭国伝』には、大業三年（六〇七、推古天皇十五年）、朝貢の記事、翌年、文林郎裴清を遣す。倭国王の国書に「日出処天子致書日没処天子無恙云云帝覽之不悦」の有名な記事がある。同十八年へ六一〇〇三月、高麗王、僧曇徴、法定を貢上す。曇徴は、五経を知り、よく彩色、紙、墨、碾磑^{みずうす}を作った。「蓋造碾磑、初于是時歟」とあり、紙の製法がこの時に始まるとは書かれていないので、紙の製法そのものは、早く伝わっていたことになる。

中国で紙をはじめて作ったのは、後漢の蔡倫（？——一二二頃）であるとされてきたが、最近の発掘調査で、蔡倫以前の時代の紙が発見されたことから、蔡倫は紙の製法の改良者であるとされるようになった（阿辻哲次『知的生産の文化史』一九九一年 丸善ライブラリー）。

中国では、紙の発明以後、その製法は門外不出とされていた。紙以前は、外交文書、政治的傳達、記録、五経等は、竹簡、木簡に書かれた。また、絹布にも書かれた。日本人が目にした漢字は、鏡銘のほかに、印、外交文書（国書）、種々の書物などがあることは、以上に見てきた通りである。

魏王が卑弥呼に与えた詔書（景初三年（二二九）は、「伝送文書賜遺之物詣女王」とあるので、紙に書かれていたであろうか。正始八年（二四七）に、卑弥呼が狗奴国と対立して使者を帯方郡に送った際に、塞曹掾史張政等の使者が倭国に持参した「詔書」と告諭のために作られた「檄」はどうであったか、漢代の「檄」は二尺（約四六センチ）の木簡に記されたものであった。

日本における漢字の使用は、五世紀の鉄剣、鏡の銘が示すように「服此刀者長寿、子孫注々得三恩也、不失其所統」（江田船山古墳太刀銘）とか、「念長寿」（和歌山県橋本市隅田八幡宮人物画像鏡銘）など、そこに神秘的な呪力を感じさせるものがあつた。

（三）漢字の定着——七世紀

七世紀になると、漢字の使用層、識字層の広がりを思わせるような土器に漢字を刻したり、墨書したものの、また銅板などによる墓誌、木簡が発見されている。宇治橋断碑（大化二年（六四六））、群馬県高崎市の上碑（天武十年（六八二））などの碑も建てられた。

最古の墓誌は、天智七年（六六八）の船首王後の墓誌である。

惟船氏、故、王後首者、是船氏中祖、王智仁首児、那沛故首之子也、生於乎婆陀宮治天下、天皇之世、奉仕於

等由羅宮、治天下、天皇之朝、至於阿須迦宮治天下、天皇之朝、天皇照見其才異、仕有功勲、勅賜官位大仁

品為第、三殞亡於阿須迦、天皇之末歲次辛丑十二月三日庚寅、故戊辰年十二月、殯葬於松岳山上、共婦安理故

能刀自同墓、其大兄刀羅古首之墓、並作墓也、即為安保万代之靈基、牢固永劫之宝地也。

最後の句に、文字に記すことによる呪力信仰が感じられる。

中国の墓誌を真似た威奈大村墓誌（慶雲四年へ七〇七）のような三九二字のものもあるが、一九七九年に発見された太安万侶の墓から出土した墓誌は、次のように簡略なものであった。

左京四条四坊従四位下勲五等太朝臣安万侶以癸亥年七月六日卒之 養老七年十二月十五日乙巳

漢字の広がり、文字として定着したさまは、推古天皇二十八年（六二〇）十二月に、聖德太子が蘇我馬子とともに『天皇紀』『国紀』などを録したとあることにも示されている。

文字があつてはじめて歴史が書かれるのである。『天皇紀』『国紀』は、蘇我氏滅亡に際し、焼かれたが、火の中から船史恵尺によつて取り出されたというが、現存しない（皇極天皇四年へ六四五～六月）。

仏教では、天皇と国家の安寧のために仏像、諸寺の建立が行われた。推古天皇三十二年（六二四）九月には、寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、計千三百八十五人と録されている（『日本書紀』）。經典の読誦、研究とともに写経も行われたであろう。唐、高麗、百濟などから僧が来朝し僧正などに任じられている。

推古天皇十四年（六〇六）七月、天皇の命により聖德太子が『勝鬘經』を講じ、三日で説き終えた。また『法華經』を講じた。

『上宮聖德法王帝説』は、「造法花等經疏七卷、号曰上宮御製疏」と伝える。天平十九年（七四七）の「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」に

法華經疏参部各四卷

維摩經疏壹部三卷

勝鬘經疏壹卷

右上宮聖德法王御製者

とあり、また、天平宝字五年（七六二）十月一日の「法隆寺縁起并資財帳」には

法華經疏肆卷正本者 帙一枚 著牙
律師法師行信覓求奉納者

維摩經疏參卷正本者 帙一枚 著牙

勝鬘經疏壹卷帙一枚 著牙

右上宮聖德法王御製者

とある。このうちの「法華經疏」が聖德太子自筆として伝えられている。『法華義疏』と記されたこの全長五七・三メートルに及ぶ巻物の総字数八万七五〇〇字が聖德太子自筆なら日本人が紙に書いた漢字の筆跡として最古の遺品となるが、自筆ではないとする意見も強い。最近では、書法、叙述内容の検討から『法華義疏』は中国人の著作で、遣隋使によってもたらされたものか、或は、渡来人によつて朝鮮から持ちこまれたものかとする説が提起されている（魚住和晃『「書」と漢字』一九九六年 講談社選書メチエ）。

万葉仮名のうち、訓仮名は、はじめ、固有名詞に用いられ、その後、一般語にも用いられるようになる。

一九八二年に、島根県松江市大草町一号古墳から出土した鉄刀に「各田了臣」という銀象嵌の銘文のあることが確認された。同古墳は六世紀のもので「各田了」は「額田部」を示すものと考えられている。これによれば、訓仮名は六世紀に出雲でも用いられたことになる。

『上宮聖德法王帝説』所引の『天寿国曼荼羅繡帳銘』には、聖德太子の母「孔部間人公主」の表記がある（七世紀）。

白雉二年（六五二）の法隆寺旧蔵「金銅觀音菩薩造像記」に

辛亥年七月十日記笠評君名大古臣、辛丑日崩去辰時故、兎在布奈「太利古臣、又伯在建古臣二人志願この「大古臣」「建古臣」は訓仮名である。

天武六年（六七七）の「小野朝臣毛人墓誌」に飛鳥淨原宮、天武十年（六八二）の「山上ノ碑」に「佐野」「建守

命」^{（にじりかわ）}「新川臣」^{（おほこ）}「大児臣」、天武四年（七〇〇）の「那須造碑」に^{（あすかきよみはら）}「飛鳥淨原御宮」などがある。

一般語では、推古十四年（六〇六）の「金銅弥勒菩薩造像記」に

歳次丙寅年正月生十八日記、高屋大夫、為分韓婦夫人名阿麻古願、南无頂礼作奏也

「作奏」^{（つくろふ）}であろう。

「山ノ上碑」に、「定賜」^{（さだめたまへる）}「母為」^{（ははのため）}がある。

訓仮名の成立は、漢字（漢語）とその訳語との国定化の結果である。一漢字に一訳語という形にならなければ、訓仮名は成立しない。訓仮名の成立によって、これまでの字音仮名（仮借の方法による）とあわせて、かなり自由に日本語を漢字で書きあらわすことが可能になる。

ここに至って、正式の文章である漢文（中国文）のほかに、日本語の文を漢字と漢文的措辞によって書いたものが現れることになる。『法隆寺金堂薬師仏光背銘』、『山ノ上碑』、『野中寺弥勒菩薩造像銘』などがそれである。

池辺大宮治天下天皇大御身勞賜時歳次丙午年召於大王天皇与太子而誓願賜我大御病太平欲坐故将造寺薬師像作仕奉詔然当时崩賜不堪者小治田大宮治天下大王天皇及東宮聖王大命受賜而歳次丁卯年仕奉（法隆寺金堂薬師仏光背銘）

「池辺大宮」「小治田大宮」のような訓仮名、「大御身」「賜」「欲坐」のような敬語表現、また「欲坐」「造不堪」「受賜」のような語序は日本語的である。「召於大王天皇與太子而」などは、中国語の助辞を強いて入れた感がある、などとして著名なものである。「丁卯」は、六〇七年であるが、文中に「天皇」の語のあることから、近年は、中国における君主の称号としての「天皇」は、六七四年以降であるから、この銘文は持統朝（六八七―六九九）以降に引き下げられる考えが有力になっている（『日本の古代14ことばと文字』五六二ページ）。

辛巳歳集月三日記佐野三家定賜健守命孫黒壳刀自此新川臣兒斯多々弥足尼孫大児臣聚生兒長利僧母為記定文也

放光寺僧（山ノ上碑）

「辛巳歲」は、天武十年（六八二）である。全文が日本語の語順に従って漢字で書かれている。助詞や助動詞の表記はないが、「定賜」という敬語表現があり、「（佐）野」の「建守」「黒（売）」「此」「新川」「臣」「大児」「母」「為」など漢字とその訓に相当する表記になっている。「山ノ上碑」は、以前は「山名村碑」と呼ばれていた。群馬県高崎市山名町にある。地方の識字層である僧が、漢文の正しい知識が乏しかったためにこんな文章を書いたというよりもむしろ日本語を漢字を使って表記しようとした試みと考えるべきであろう。

丙寅年四月大旧八日癸卯開記栢寺知識之等詣中宮天皇皇大御身勞坐之時誓願之奉弥勒御像也友等人数一百十八是依六道四生人等此教可相之也（野中寺弥勒菩薩造像銘）

「大御身勞坐之時」という敬語表現は、『法隆寺金堂薬師如来光背銘』の「大御身勞賜時」と同様の表現・表記である。「是依六道四生人等此教可相之也」は、「可相」という表現はあるが、全体として日本語の語順になっている。なお、「丙寅年」は、天智五年（六六六）であるが、「大旧八日癸卯開」とあることから旧暦の元嘉暦と新暦の儀鳳暦の併用が始まった持統四月（六九〇）十一月以降に、この銘文が刻まれたことになるという（東野治之「天皇号の成立年代について」『正倉院文書と木簡の研究』）。

(四) 律令制と漢字——八世紀

近年の発掘調査によって、大量の木簡が発見され、漢字使用の状況が明らかになりつつある。たとえば、七世紀の藤原宮跡出土の木簡は四千点以上に達し、八世紀の木簡になると、平城宮の東南隅から一万点、長屋王邸関係のものが五万点、その近辺から十萬点など、全国的には二十萬点に及ぶ膨大な数になっている。一九六一年には全国

で四六點しか発見されていなかったのであるから、今後二十万点の木簡の分析によって、漢字使用の実態がさらに明らかになることは確実である。

日本の木簡は七世紀前半の難波宮跡地から発掘されたものが最古である。

日本の律令制は、天武十年（六八一）に律令制定が命じられ、持統三年（六八九）に至って、令が完成した。律の方は完成せず、唐律を準用していたと考えられている。

文武四年（七〇〇）に、大宝律令の令が刑部親王、藤原不比等によって撰修され、翌大宝元年（七〇一）に施行された。律は同年に完成し、大宝二年に施行された。この大宝律令は、養老二年（七一八）、藤原不比等によって改修され、天平宝字元年（七五七）から施行された。今日見る律令は、この養老律令であるが、その後、明治維新まで形式的に存続した。

律令制度では、全国に官僚制を行きわたらせ、中央の神祇官と太政官を中心に、地方では、国郡制が施行され、全国民の戸籍と税を徴収するための計帳が作製された。こうした行政組織は、文書を不可欠のものとした。紙と同時、日常的な物品の送り状、受け取り、物品の請求、出納記録、荷札などに木簡が使われた。二十万点に及ぶという木簡は、こうした律令制において使用されたもので、中には、習字や落書もある（鬼頭清明『古代木簡の基礎的研究』一九九三年 塙書房）。

律令制国家体制の整備とともに進められたのは、国家仏教というより仏教国家の建設というべきものであった。

仏教による鎮護国家、国家安寧を計って、全国的に寺院が設けられ、僧尼令によって、僧尼を統制した。僧尼は、寺院内での教典研究と鎮護国家の祈禱を任務とし、民間への布教は禁じられていた。写経が盛んに行われた。

天武二年（六七三）三月、『日本書紀』はこう記している。

聚書生、始写一切經於河原寺

「書生」とは、写経生のことである。写経生による写経の最初である。国家的事業としての写経が行われ始めたのである。

天武五年（六七五）十一月には、

遣使於四方国、説金光明經、仁王經。

とある。全国の寺で、金光明經、仁王經を説かせたというのは、金光明經と仁王經は、国家鎮護の經典であつたからである。

寺には経蔵があつて、大寺では膨大な量の経卷を所蔵していた。

たとえば、宝龜十一年（七八〇）の「西大寺資財流記帳」には、

惣大小乗律論疏肆部壹万漆千二百二十三卷
又雜經律參肝壹佰卷

とあつて膨大な量の経卷が所蔵されている。

称徳天皇が藤原仲麻呂の乱の後、宝龜元年（七七〇）に国家安泰を願つて造らせ、十大寺に各十万基を分置した「百万塔」にしても、実際に百万塔を造つたのである。法隆寺に五万基が現存する。

この「百万塔」に納められた「百万塔陀羅尼」は、現存最古の印刷物とされている。その印刷方法は銅版か木版かという論争が行われてきたが、一九七〇年、天理大学におけるシンポジウムで、木版に彫られて、それに墨をつけ、紙を押したものであるという結論になったという（阿次哲次『知的生産の文化史』丸善ライブラリー。詳細は、天理図書館『ビブリア』第24・25号）

律令制と国家仏教によつて八世紀の日本は、漢字文化国家となつていった。

律令における漢字文化の様相を見てみよう。

「公式令」は、公文書の様式、作成、施行上の諸規定を主とするものである。「詔書式」の宣命体以外の文章は、

漢文である。

詔書式の最初に掲げられている次の五つの形式は、宣命体にのみ用いられ、漢文体のものには用いられない。

明神御宇日本天皇詔旨云々。咸聞。

明神御宇天皇詔旨云々。咸聞。

明神御大八州天皇詔旨云々。咸聞。

天皇詔旨云々。咸聞。

詔旨云々。咸聞。

また、文章中で敬意を表すために、改行し、次行の行頭にその語を記す「平出」（皇祖、皇祖妣、皇考、皇妣、先帝、天子、天皇、皇帝、陛下、至尊、太上天皇、天皇諡、太皇太后、太皇太妃、太皇夫人、皇太后皇太妃、皇太夫人、皇后）の語は平出する）、また、敬意を表すために、その語の上の一字分を空ける「闕字」（大社、陵号、乘輿、車駕、詔書、勅旨、明詔、聖化、天恩、慈旨、中宮、御_{（斥至尊）}、闕庭、朝廷、東宮、皇太子、殿下、この類は、闕字にする）が規定されている。

また、公文書を「真書」即ち楷書で書くこと、数字は「大字」（一、二、三を壹、貳、参と書く類）で書くことが規定されている（凡公式、悉作「真書」。凡是簿帳、科罪、計贓、過所、抄牘之類有_レ数字者、為_二大字_一）。

詔勅を農村等の末端の人々にまで告知する方法として、次のように定めてある。即ち、里長（五十戸の長）、坊長を巡歴させ、百姓に宣示して全ての人々に知らせるといのである（凡詔勅頒行、関_二百姓_一事、行下至郷、皆令_二里長坊長、巡歴部内_一、宣_二示百姓_一使_二人曉悉_一）。この規定によって、漢文体、宣命体に書かれた詔勅が百姓に関する場合は、里長、坊長のところまでもたらされ、それを百姓に見せ、読んできかせて、わからせたということになる。詔書や上書（天皇に対する上書）以下、文書の誤には、笞刑が課せられた。一般の公文書でも、文字の脱乗、錯

詔書は漢文体のもののほか、和文体の宣命がある。

(天武天皇即位宣命〔六九七〕)

宣命体は、宣命使が読みあげるために、漢字の訓と音仮名を用いて表記した和文体の文章である。

漢文（中国語文）は、天皇、皇族、貴族、官人、僧侶などに必須のものであった。

学会、職員会によれば、大学では、五位以上の子孫と東西の史部の子を大学生として五〇〇人、このほか算生三

○人、国学では郡司の子弟を国学生として全国六十六国で二五二〇人、計二九五〇人。礼記、春秋左氏伝を大経、毛詩、周礼、儀礼を中経、周易、尚書を小経とし、孝経、論語を必須と定めている。

考課令には、「明経」は、論語、孝経に全く通じていない場合は、他の経ができて不合格とある。また「進士」は、時務策と文選、爾雅から出題された。

官人たちの漢籍の必須の教養を示すものである。数多く出土している奈良時代の木簡や正倉院文書には漢字漢文の練習をしたと見られるものがあり、『千字文』『論語』『文選』の習書が発見されている。岩手県水沢市の胆沢城跡出土の漆紙文書に『文選』の習書例、また大宰府跡出土木簡に『魏徴時務策』の習書があることから、奈良の都だけでなく、全国的なものであったとされている。(東野治之『木簡が語る日本の古代』岩波新書、『日本の古代』14 ことばと文字』中公文庫)

律令制は、いわゆる公地公民制で、公民は、戸籍に登録され、口分田を与えられ、租税(租・庸・調・雑徭)を収取され、壮丁は兵士とされた。

戸籍は、『庚午年譜』(天智九年へ六七〇)に始まる。

全国の地名とそこに住む人々の名前が漢字で書かれたのである。

戸籍は、六年に一回作成されたが、戸主を筆頭に妻子、兄弟、奴婢などその戸に属するひとを登録し、五〇戸(二里)ごとにまとめた。

大宝二年(七〇二)の戸籍を見ると、地名、人名が訓仮名音仮名を用いて表記されている。

御野国味蜂間郡春部里大宝式年戸籍

上政戸国造族石足戸口十三正丁二 少丁三
兵主二 少子二

緑見一并十正女二 緑女一并三

下々戸主石足年卅三
兵士

戸主兄国足年卅四
正丁

嫡子安倍年六
小子

戸主弟高嶋年廿七
兵士

嫡子八十麻呂年二
緑児

戸主弟久留麻呂年廿五
正丁

次大罷年廿
少丁

次広国年十九
少丁

次友乎年十八
少丁

戸主甥奈世麻呂年十
少子

戸主母国造族麻奈売年卅七
正女

戸主妻国造族祁

大羅児阿尼売年二
緑女

多女年卅二
正女

「御野国」は、和銅六年（七二三）の「畿内七道諸国郡名、着好字」の勅命でその後、好字の「美濃国」に改められる。人名の「石足」「国足」「高嶋」「広国」などは、漢字訓を使って書かれている。「安倍」「久留麻呂」「奈世麻呂」「麻奈売」「阿尼売」などは音仮名、「八十麻呂」の「八十」は訓仮名である。

律令制における税は調・庸は国税、租は地方税であった。国家財政の基盤となる調・庸の台帳として、「計帳」が作成された。

計帳は、大宝令によって、毎年六月三十日までに、各戸の戸主がその戸内の口数、年令、容貌、課・不課の別を記したものを作って、国司に提出し、国司はこれを郡別、国別にまとめ、人口と調庸の総計を出し、八月三十日までに太政官の許に送ることになっていた。各戸の戸主は、家族の名を漢字で書く建前になっていたことになる。

見不輸伍人正丁三
残丁二

輸調

紙市戸主出雲臣冠、年伍拾漆歳、残疾、両耳聾、左食指爪无

妻木勝族小玉売、年式拾捌歳、丁妻、額下毛在

男出雲臣石前、年参拾参歳、正丁、頤黒子

男出雲臣石楯、年参拾歳、残疾、右足踝筋絶、左上頤黒子

男出雲臣稻日佐、年拾壹歳、小子、額疵

男出雲臣人日佐、年拾歳、小子、右頤黒子

男出雲臣働長、年伍歳、小子

男出雲臣市日佐、年参歳、緑子

女出雲臣稻虫売、年参拾陸歳、丁女、頤黒子

女出雲臣鴨刀自売、年漆歳、小女

出雲臣忘奈売、年陸拾肆歳、老女、左頤黒子

出雲臣僧、年拾貳歳、小子、眉間黒子

出雲臣広刀自売、年拾貳歳、小子、左目悪

出雲臣広宅売、年肆歳、小子

甥出雲臣田村、年参拾参歳、正丁、右高頤黒子

甥出雲臣石竹、年参拾歳、正丁、右頤黒子

(神亀三年へ七二六、山背国愛宕郡雲上里計帳)

人名に「冠」「小玉売」「石前」「石楯」など訓仮名が多く用いられている。「左食指爪無」「額下毛在」「右足踝筋絶」など、日本語の語序に従って、漢字を置いている。なお、「山背国」は、後に「山城国」に改字される。

現存の計帳は、官人によって整理されたものであるが、戸主が提出するものも「疾」「聾」「踝」「疵」「頤」など難しい漢字で記されているので、最初から官人の手によって書かれた可能性が大きい。

(五) 文字生活

八世紀までの文字生活は、律令制の下での文書行政が国民生活に及ぼした影響が大きかったと考えられる。都是もちろんであるが、地方の国、郡の中心地の官人が文字即ち漢字の担い手であった。各地の遺跡、遺構から出土する木簡や墨書土器によって、漢字が公的な性格を持ちつつ日常生活にまで広まり、定着していた様相が明らかになってきた。

神を祭り祈る場合にも、漢字が使われるようになり、中国伝来の吉祥文字や吉祥句が土器に書かれた。「平安」「太富」「加福」「万」などの類である。皇朝十二銭の最初である「和同開珎」（和銅元年へ七〇八）の「和銅」も吉祥句とする説がある。

この時代、和銅五年（七一二）の太安万侶による『古事記』、和銅六年（七一三）の『風土記』撰進の勅命、養老四年（七二〇）舍人親王等撰の『日本書紀』と勅命による書物が作られた。八年の間のことである。

『風土記』『日本書紀』は、漢文体で書かれている。当時の文章は、当然のことであるが、漢文体で書かれているのが普通であって、『古事記』のような文体は、極めて特異なものであった。そのために、太安万侶は、序において、その文章について、説明を加えている。そのままでは、読めないことを懸念したためである。

於焉、惜旧辞之誤忤、正先紀之謬錯、以和銅四年九月十八日、詔臣安万侶、撰録稗田阿礼所誦之勅語旧辞、以獻上者、謹隨詔旨、子細採摭、然上古之時、言意並朴、數文構句、於字即難、已因訓述者、詞不逮心、全以音連者、事趣更長、是以今、或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓録、即、辞里匠見、以注明、意況易解、更非注、亦、於姓、日下謂玖沙訶、於名帶字、謂多羅斯、如此之

類、随本不改。

安万侶の旧辞を漢字で写そうとした苦心の文章は、漢文を見慣れた目には、珍奇な漢文と映じたことであらう。

『上宮聖德法王帝説』、『家伝』、『南天竺波羅門僧正碑并序』、『道瓊和上伝纂』、『七代記』、『唐大和上東征伝』(宝龜十年へ七七九)淡海三船)など、『寧楽遺文』所収の伝記は、全て漢文である。

漢詩集の『懷風藻』(天平勝宝三年へ七五一)成立)は、当然として、『万葉集』の題詞、左注もまた、漢文である。

文章といえ、格の正しい漢文(中国語文)を書くのがあたりまえであつた時代なのである。

文学的なものとしての和歌、歌謡の表記を次に見てみよう。

『古事記』『日本書紀』に見られる歌謡は一字一音式の字音仮名で表記されている。『上宮聖德法王帝説』の三首の和歌も同様である。宝龜三年(七七二)、藤原浜成が勅命によって作成した『歌經標式』も字音仮名で書かれている。また、『仏足石歌』も一字一音式の字音仮名で刻されている。

夜久毛多都 伊豆毛夜幣賀岐 都麻基微爾 夜幣賀岐都久流 曾能夜幣賀岐袁 (古事記 上)

夜句茂多免 伊弩毛夜霸餓岐 免磨語味爾 夜霸餓枳都俱廬 贈迺夜霸餓岐廻 (日本書紀 神代上)

同じ歌であるが「夜」「毛」「伊」「都」「岐」のみ共通である。これは『古事記』が呉音、『日本書紀』が漢音に基づく字音仮名を用いているためである。

伊加留我乃 止美能乎何波乃 多歡婆許曾 和何於保支美乃 弥奈和須良穀米 (上宮聖德法王帝説)

美阿止都久留 伊志乃比鼻伎波 阿米爾伊太利 都知佐門由須礼 知々波々賀多米爾 毛呂比止乃多米爾 (仏足

石歌)

和歌や歌謡を一字一音式の字音仮名で書くことは、中国で既に漢訳仏典の陀羅尼に用いられていたものの影響で

あると言われている（神田秀夫説）。

一九四八年、法隆寺五重塔修理の際、初層天井裏に、「奈尔波都尔佐久夜己」という落書が発見され、話題になった。これは、『古今和歌集』仮名序で紀貫之が「てならふ人のはじめにもしける」とした「なにはづにさくやこの花冬ごもりいまを春べとさくやこの花」の初めの部分である。その後、平城宮跡出土の木簡にも見られ、万葉仮名の手習いの手本になっていたことが明らかになった。工人たちの間にも万葉仮名が広まっていたことを示すものである。

万葉仮名と言え、万葉集の用字ということになる。

『万葉集』の用字法について、稲岡耕二氏は、かつて、次のように分類した（『国文学解釈と鑑賞』一九六六年一〇月）。

A 表意文字として

- (1) 国語の意味に相当した漢字を用いたもの（訓読）
- (イ) 一語を一字に表したもの

日 ^ヒ 山 ^{ヤマ} 滯 ^{ナミ} ……正訓
暖 ^{ハル} 金 ^ネ 疑 ^{ウタガハシム} ……義訓

- (ロ) 一語を二字以上で表したもの

年魚 ^{アユ} 芽子 ^{ハギ} 白水郎 ^{アヲ} ……正訓
丸雪 ^{アツレ} 恋水 ^{コイミヅ} 未通女 ^{ミトウメ} ……義訓

- (2) 漢語をそのまま用いたもの（音読）

餓鬼 ^{ガキ} 法師 ^{ホフシ} 布施 ^{フセ} ……字音正字

B 表音文字として

(3) 漢字の音を借りたもの (音仮名)

(イ) 一字一音のもの

可^カ 波^ハ 弥^ミ 夜^ヤ

(ロ) 一字二音のもの

甘^{カム} 覽^{ラム} 廉^{レム} …… (二合仮名)

(4) 漢字の訓を借りたもの (訓仮名)

(イ) 一字一音のもの

杵^キ 砥^ト 箕^ミ 目^メ

(ロ) 一字数音のもの

蟻^{アリ} 夏^{ナツ} 慍^{イナリ}

(ハ) 二字一音のもの

嗚呼^ア 五十^イ

C 戲書 (連想訓)

八十一^ク 山上復有山^{イ ア}

右のうちBの表音文字が狭義の万葉仮名である。なお、稲岡氏は、下位分類として、「略音」(安^ア 吉^キ の類)、「略訓」(足^シ 跡^ト の類)の別を立てる場合があることと、「清也」(サヤケサ)「欲焉」(ホリ)など助字などを含むものを「完読」「不完読」を基準にして分類する場合もあることを注意している。

『万葉集』の万葉仮名の特色は、稲岡氏のA(1)訓読における「義訓」とC戲訓にある。

一字一音式の音仮名表記の多い巻は、巻五、巻十四東歌、巻十七、巻十八、巻二十防人歌などである。
 戯訓は、謎のようなもので、一種の文字遊び、ことは遊びの要素を持つ。義訓にも似たところがある。その二、
 三を示してみよう。

ミルゴトニコビハマサレド イロニイ デ ヒトシリヌベミ フユノヨノ アカンモエヌヲ イ セネズニ フレハソコフレ イモガタ
 毎見恋者雖益 色二山上復有山者 一可知美 冬夜之 明毛不得呼 五十母不宿二 吾菌曾恋流 妹之直
 カニ
 香仁(巻九 一七八七)

「山上復有山」旧い訓の中には、「ヤマノウヘニマタアルヤマハ」と訓んだものがあるが、中国で行われた文字謎
 で、「出」をいう。この歌には「色二……」「五十母不寝二」と数字で遊んでいるところがある。

トラチネノ ハハガカフコノ マユコモリ
 垂乳根之 母我養蚕乃 眉隠 馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿 異母二不相而(巻十二 二九九一)

「馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿」、最も有名な戯訓である。「馬声」は馬のいななきを「イイン」と聞きなしたものの、

「ン」は無表記。「蜂音」は蜂の羽音を「ブン」と聞いたもの。「石花」はカメノテの異名。「蜘蛛」はクモ。

タマコソバ ナノタエミバ アダモアフトク
 玉社者 緒之絶薄 八十一里喚鶏 又物逢登曰(巻十三 三三三〇)

「八十一」は「九九八十一」で九九の声。

ヨシユヤシ シナムヨウキモ イケリトモ カクノミコソ アガコヒワタリナメ
 従恵八師 二々火四吾妹 生友 各鑿社 吾恋度七目(巻十三 三三九八)

「二々」は「二々四」である。「八師」「七目」と数遊びの要素がある。

ハヤイキナ イソシナキミヤ アヒミムト ナモヒシコココ
 早去而 何時君乎 相見等 念之情 今曾水葱少熱(巻十一 二五七九)

「少熱」は「ぬるむ」の義訓。完了の助動詞「ぬ」の連体形「ぬる」に用いている。

ヒトゴトヲ シゲミコチ タミ フガセコヲ メニハミレドセ アフヨシモナシ
 人言乎 繁三毛人髪三 我兄子乎 目者雖見 相因毛無(巻十二 二九三八)

「毛人髪」は「毛人」(エミシ)の毛の多いのを「こちたし」と義訓したもの。「毛無」は、その反対で一種の遊
 び。

春霞 ハルガスミ 田菜引 タナビク 今日之 ケフノ 暮三伏 ユフツク 一向夜 イコウヤ 不穢照良武 キヨクテルラム 高松之野余 タカマツノノニ (卷十 一八七四)

こんな義訓もある。「三伏一向」は、博奕の語という。樗蒲 ちよほ というサイコロに当る楕円の板の表を白く裏を黒く塗り、四枚一揃いを投げて、裏が三枚、表が一枚、出た場合をツクといい、裏が一枚、表が三枚出た場合をコロといつたという。その歌もある。

アツサ アツサ コミ スエノナカ スエノナカ コロ コロ ヨドメリシ ヨドメリシ 君者会奴 キミニハアヒヌ 嗟羽将息 ナケキハヤメム (卷十二 二九八八)

梓弓 シユビテ 末中 ワカサケマテシ 一伏三起 スエノエノハマノコマツハ 不通有之 スミナトウアリ 住吉乃浜乃小松者 スミタニノハマノコマツハ 後毛吾松 ノチモウカツ (卷三 三九四)

「義之」が義訓であるが、複雑である。まず「義之」は「義之」と通用させた。「義之」は、書聖と謳われた中国の王羲之である。書家は「手師」と呼ばれたが、書家の代表として、後世、「大師」といえば弘法大師、「太閤」といえば、豊臣秀吉、「黄門さま」といえば水戸光圀というように、「手師」といえば、王羲之をさしたので、こうした義訓が生まれた。王羲之の子王献之も書の名手であつたので、王羲之を「大王」、王献之を「小王」といつたので、「大王」と書いて「てし」を訓ませるものもある。

クロカミ シラクルマテ 黒髪ノ白髪左右跡 ムスビテシ 結大王 ココロヒトツツ 心一乎 イマトカメヤモ 今解目八方 イマトカメヤモ (卷十一 二六〇二)

正倉院文書の「東大寺献物帳」の光明皇后献納品に「榻管右将军王羲之草書」が数多くある。「榻」は「榻模」で透かし写しのことである。が、中に、天平宝字二年(七五八)六月一日に勅によって追加奉献された「大小王真跡一卷 黄半紙、面有天王書九行七十七字、背有小王書十行九十 九字、両端黏青褐紙。又胡桃褐紙裏、著紫綺帶、水精軸」がある。現存しないが、「大王」は王羲之、「小王」は王献之である。

ここで、文字生活におけるコミュニケーションとして、手紙文をとりあげてみよう。『寧楽遺文』に「人々啓状」として、正倉院文書から五一通が収められている。

一般的な書状は、書式に従い、漢文体である。

謹頓首啓

請好醬三四升許

右、以今日、私所可齋食、望請垂恩余、^歎附所願成熟、仍附鴨部、謹頓首啓

六年閏十二月十四日下道主謹狀

謹上 廣万呂尊

天平宝字六年（七六二）に、造東大寺司案主である下道主が好い醬油三四升を乞うた手紙である。

謹 通下案主御所

奉別以来、經數日、恋念堪多、但然当此節、撰玉鉢耶可、但下民僧正美者、蒙恩光送日如常、但願云、可日玉面參向奉仕耶

一 佐官尊御所申給、勢多庄北辺地小々欲請、又先日所進大刀子、若便使侍者下耳、若无、後日必々請給
春佐米乃 阿波礼

天平宝字六年閏十二月二日

下僧正美謹狀

別れてからの消息をたずね、勢多庄の北辺の土地を少々欲しいと請い、また先日たてまつた大刀子を使使につけて給わるよう願っている。最後に「春雨のあはれ」と万葉仮名で、感慨を述べている。この書状は、全部朱で書いてあるというが、なぜ朱書きしたのか不明である。

謹解 申請海上郡大領司仕奉事

中宮舍人左京七条人従八位下海上国造他田日奉部直神護我下總国海上郡大領司爾仕奉止申故波、神護我祖父小乙

下忍、難波 朝庭少領司爾仕奉支、又外正八位上給号、藤原朝庭爾大領司爾仕奉支、兄外從六位下動十二等国足、奈良・朝庭大領司爾仕奉支、神護我仕奉狀、故兵部卿從二位藤原卿位分資人、始養老二年至神龜五年十一年、中宮舍人、始天平元年至今廿年、合卅一歳、是以祖父父兄良我仕奉祚留次爾在故爾海上郡大領司爾仕奉止申

下総海上郡国造他田日奉部直神護が祖父以来の由緒や自分の功勞を述べて、海上郡大領に任ぜられるようお願いしたもので、全文が宣命体で書かれている。

謹啓 若子式所恋狀

衣笠女者至夕時父尊者

者 之等乃未 鳴恋侍

又 六麻呂日々 知麻止夜^波

……………鳴恋侍耳

不別幣 謹啓 真瀬女申狀

写經生の落書きで恋文である。天平宝字六年（七六二）以前に書かれたもの。「戲書啓」とよばれ、「鳴恋侍」^{なきこひはべり}とあることでも知られている。

このように、書狀は、正式な漢文体の書式を守ったものが普通であるが、宣命体を用いたものや漢字の訓と表音仮名を用いた「戲書啓」のようなごく日常的なものまであった。

このように見えてくると、一字一音式の万葉仮名で書かれた正倉院蔵の二通りの文書は、当時としても特殊で、わかりにくいものではなかったかと思われる。多少の漢字（漢語）の知識があれば、「戲書啓」のような書き方の方がわかりやすかったであろうし、「春佐米乃 阿波礼」と書くこともできた。宣命書きにすることも意味を伝えやすい形式であった。

次の正倉院文書の万葉仮名文は、どう読むのか、難解なものである。手紙文とすれば、相手は、すらすらと理解できたのであろうか。

和可夜之奈比乃可波利爾波於保末之末須美美奈美乃未知奈流奴乎宇氣與止於保止己可都可佐乃比止伊布之可流可由惠爾序札宇氣牟比止良久流末毛太之米弓末都利伊礼之米太末布曰與禰良毛伊太佐牟之可毛己乃波古美於可牟毛阿夜布可流可由惠禰波夜久末可利太末布曰之於保己可ッ可佐奈比氣奈波比止乃太氣太可比止□己止波宇氣都流

布多止己呂乃己乃己乃美美毛止乃加多知支々多末了爾多天万都利阿久□之加毛與禰波夜末多波多万波須阿良牟伊比禰與久加蘇マ天多末不マ之止毛知宇良波伊知比爾惠比天美奈不之天阿利奈利^{支氣波加之古之}
 一久呂都加乃伊禰波々古非天伎
 一田宇利万多已禰波加須

文字生活においては、参照する辞書が必要である。輸入され、書写された漢籍、仏典の読解、また文章作成、特に漢詩の押韻については辞書が不可欠であった。

天武十一年（六八二）三月、『日本書紀』は、丙午、令境部連石積等、更肇傳造新字一部四四卷」と録している。日本最初の辞書であると言われているが、詳細は不明である。

境部石積（坂井部石積）は、白雉四年（六五三）五月の第二回遣唐使に学生として渡唐している。また、天智四年（六六五）十二月に第四回遣唐使として渡唐し、天智六年（六六七）十一月に、大使格で帰国している。『新字』は新たな中国音としての漢音による辞書であったかも知れない。

一九九八年九月四日、奈良国立文化財研究所は、奈良県明日香村の飛鳥池遺跡出土の八世紀初めの木簡に漢字の発音を示したものがあり、字典のようなものを書き写したものでらうと発表した。木簡の長さ一八・七センチ、幅一・五センチで、「熊^{吾汗}熊彼下通^{布ナ}繼^尔上横詠營詠」と書かれている。「熊」に「^{吾汗}汗」、「^尔繼」に「^尔尔」、「横」に「詠」、「營」に「詠」とある。二行割りの小字と大字とあるが、漢字の発音を示したもので、万葉仮名のように見えるものもあるが、字音仮名として、当時の日本人の漢字の発音を示したものとには断定できない。字書的なものが確認された意義は大きい。

なお、奈良国立文化財研究所は、同時に、七世紀後半の木簡（長さ二十一センチ、幅二・四センチ）に、表に「白馬鳴向山 欲其上草食」、裏に「女人向男咲 相遊其下也」と書かれた漢詩風のものがあったことを発表した。最古の漢詩と新聞は報じたが、当時、日本人が漢詩を楽しんでいたことを示すものである。

仏典の語注である「音義」も作られた。現存の『新訳華嚴經音義私記』は延暦十三年（七九四）の写本であるが、成立は奈良時代とされている。

梁 力将反、橋也、二字波之、

霧煙 上音牟、訓奇利、下烟字同、氣夫利

最後に、漢字のほかに、外国文字としての梵字が仏教とともに伝えられた。法隆寺の貝葉梵本がある。東大寺大仏開眼導師をつとめた婆羅門僧正菩提僊那は、天平勝宝四年（七五二）、林邑国（現在のヴェトナム）の仏哲、唐の道璿とともに来日し、大安寺で一五年間にわたって梵語を教授したともいわれ「尤善呪術、弟子承習」と『南天竺波羅門僧正碑并序』に記されている。梵語による呪のことであろうか。平安時代になって五大院安然撰の『悉曇藏』巻第三に、婆羅門僧正本の記述があり、また仏哲が持ってきたという『悉曇章』の記録が見える。

このように梵字が伝えられたことは確かであるが、日本人の文字生活への影響は少なかった。

引用文献

『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』 岩波文庫
 『古事記』 『日本書紀』 『万葉集』 『風土記』 は、日本古典文学大系、『続日本紀』 は、新日本古典文学大系、『律令』 は日本思想体系、その他は『寧楽遺文』 による。

参考文献

岸俊男編 『日本の古代14 ことばと文字』 一九九六年 中公文庫
 鬼頭清明 『古代文簡の基礎的研究』 一九九三年 塙書房
 平野邦雄・鈴木靖民編 『木簡が語る古代史 上』 一九九六年 吉川弘文館
 東野治之 『木簡が語る日本の古代』 一九八三年 岩波新書
 魚住和晃 『「書」と漢字』 一九九六年 講談社
 阿辻哲次 『知的生産の文化史』 一九九一年 丸善
 鈴木棠三 『ことば遊び』 一九七五年 中公新書
 児玉義隆 『梵字必携』 一九九一年 朱鷺書房
 池田温編 『古代を考える 唐と日本』 一九九二年 吉川弘文館